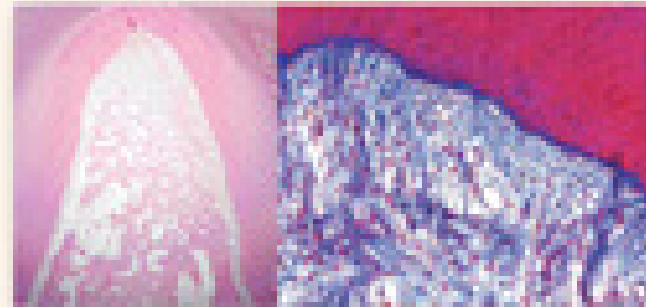


# 日本歯科評論

# 6

JUNE 2015  
No. 612  
Vol. 70(6)

Dental Review <http://www.jpdent.or.jp>



左：歯冠部と歯根部の境界部を顕微鏡で観察した様子。右：歯冠部と歯根部の境界部を顕微鏡で観察した様子。歯冠部と歯根部の境界部を顕微鏡で観察した様子。

## 特集

### 歯科衛生士の活力を引き出そう！

- 歯科衛生士の力は歯科の力——歯科衛生士の活躍領域、役割、活躍の心と情熱をのぞいて
- 歯科衛生士の業務改善に向けて
- 歯科衛生士による院内感染の予防
- 付帯業務の効率化で広がる歯科衛生士の役割
- 歯科衛生士の業務改善——歯科衛生士の活躍の場をのぞいて
- 歯科衛生士の生涯学習のあり方
- 歯科衛生士のこれからの未来

## 目次

●付録 歯科衛生士の業務改善に向けて

### 第1回 調査・部下職員の評価と治療を提案者が行う業務

／佐藤 一雄

## 目次

●付録 歯科衛生士の業務改善に向けて

### 1. 歯冠・歯牙質感覚とは何か？

——歯冠部と歯牙質感覚の関係をのぞいて

◎Dr. 齋藤 浩二

◎Dr. 齋藤 浩二 (歯冠部と歯牙質感覚の関係をのぞいて)

### 咬合性外傷——歯冠の咬合性外傷を予防するための

／佐藤 一雄

◎Dr. 齋藤 浩二 (咬合性外傷を予防するための)



## 臨床ゲノム医療研究会が発足を記念してプレスセミナーを開催

ヒトゲノム（遺伝情報）を解析することで個々の患者に適したオーダーメイド医療の実現が期待される中、ゲノム医療の普及と推進を目的とした「臨床ゲノム医療研究会」（渥美和彦理事長）がこのほど発足し、4月28日、都内のホテルニューオータニに医療関連メディアを多数集めてプレスセミナーが開催された。題して「ゲノム検診が変える、これからの医療——がんや生活習慣病に罹らない生活を実現するために」。

冒頭では渥美理事長から、「ヒトゲノム遺伝子解析技術を用いることで、がんに罹る可能性を数値として表したり、治療に用いる抗がん剤の患者ごとの有効性を予測できるよう

プレスからの質疑に答える各講師の先生方。右から3人目が渥美和彦理事長。歯科医療関連の研究者としては昭和大学歯学部・新谷 悟教授（左端）が参加した。



になってきた。この技術を日常の医療活動で有効に活用してもらうために、わが国のゲノム研究の第一人者たちと共に本研究会を設立した」と、設立主旨について説明がなされ、続いて5名の専門家によりゲノム医療の意義や可能性が示された。

歯科医療関連の研究者としては、昭和大学歯学部顎口腔疾患制御外科学教室・新谷 悟教授が参加し、

「歯科医師によるがん検診、遺伝子によるリスク予測のレベルへ」と題する講演を行い、「口腔がんの場合、前がん病変よりもさらに前の段階で遺伝子の異常を発見して対応することが大切であるが、ゲノム医療はそのリスク予測に有用である」とした。

本研究会では今後、研究データの検討と蓄積を重ねると共に、ゲノム医療の教育・普及活動を行っていく。